

天折の画家　リチャード・ボニントン

松島正一

(1)

ロンドンのオクスフォード・ストリートから北に走るベイカー・ストリートを数分歩いて右に折れると、マンチェスター・スクエアという静かな一画がある。この東側に「ウォレス・コレクション」という名の美術館がある。ここには何度か足を運んだが、オクスフォード・ストリートやベイカー・ストリートの喧騒を抜けて、美術館に辿り着くと、こんなにも閑静な場所がロンドンの中心地にあるのが不思議な気がする。ウォレス・コレクションはイギリス絵画のみならず、フランス絵画の蒐集でも有名である。また、武器、それと時計の蒐集のすばらしさは知る人ぞ知るところである。この美術館にゲインズバラやフラゴナールの大作に隠れて、多数のボニントンの小品がひっそりと展示されている。ボニントンの作品をまとめて見るのは初めての経験であったが、彼の

作品の前にたたずむと、何か懐かしい気持ちになった。なぜそのような感じを抱いたのか、その時は分からなかったが、これまでに親しんできたフランス印象派の作品に似ているからだ、と気づいたのは美術館を後にしてからであった。ボニントンという画家に興味を引かれ、彼の画集や研究書をロンドンの書店で捜してみたが、収穫はほとんどなかった。イギリスでもボニントンの評価は低いように思えた。

ところで、リチャード・パークス・ボニントン(一八〇二—一八二八)の名前は日本でどのくらい知られているだろうか。

ボニントンはイギリス生まれであるが、生涯の大部分をフランスで送った画家であるために、イギリス絵画史にも僅かしか登場しない。彼はユージン・ドラクロワ(二七九八—一八六三)、テオドール・ジェリコー(二七九一—一八二四)など日本でもよく知られている著名な画家たちと親交を結んでいる。ボニントンは大画家になる可能性を十分持っていたと思われるが、二五歳で世を去ってしまったこともその無名性と関係がありそうだ。

絵画の大きな流れとしては、ボニントンの作品はフランスのバルビゾン派に多大な影響を与えている。絵画史上の位置づけとしては、トマス・ガティン、J・M・W・ターナーなどのイギリス・ロマン派の画家と、ドラクロワ、ジェリコーなど同時代のフランスの画家とを結びつけるのがボニントンである。二五歳で夭折したわりには、彼の作品数はかなり多いが、イギリスの詩人ジョン・キーツ(二七九五—一八二一)、オーストリアの作曲家シューベルト(二七九七—一八二八)の高名さに比べると、同じ夭折でもボニントンはあまりにも気の毒な気がする。

ロンドンからノッティンガムに出かけたのは七月であった。ノッティンガムはアラン・シリトーの小説の舞台

でもあるが、そこからバスで、D・H・ロレンスの故郷イーストウッドを訪ねるつもりであった。鉄道の駅からバス・ステーションまではかなりの距離があることが分かり、それでは市内見物をとという気になり、ノッティンガム城に出かけた。驚いたことに、ノッティンガム城のなかにある「キヤスル・ミュージアム」になんとボニントンの絵がかなり多量に展示されていた。

驚くことはなかったのである。ボニントンはノッティンガム近郊のアーノルド村に生まれているのである。祖父は刑務所の所長で、ボニントンの父親もその後を継いだ。だが、やがてその職を失ってしまふ。父親は肖像画家として身を立てようとする。彼はアクアティント(蝕刻凹版法の一つ)で版画を出版したりもしている。母親の方は一時期、学校を経営したりもしている。

ボニントンの両親の経歴から考えて、彼は父親からは絵画的基盤、母親からは文学的教養を受け継いだと思われる。父親は軽率な言動が多く、卑しい人々と交際し、政治的には過激な意見の持ち主であったので、そのためにも妻の学校は破産してしまつた。一家の経済的基盤であつた学校がつぶれてしまつたので、一家はやむなくフランスのカレーへと逃亡することになる。カレーでは、ボニントン家はレース製造の仕事に携わることになる。一八一七年、この時、ボニントンは一五歳であつた。

イギリスのミッドランド地方は産業革命の中心地帯であり、産業革命の進行とともに運河が発達した地域である。運河は鉄道の発達とともにすたれてはいつたが、かなりの数の運河が保存されて残っており、利用もされている。

ボニントンの時代、つまり一九世紀初頭にあつては、「旅行」は大変な費用がかかるもので、普通の庶民には

高嶺の花であった。「旅行」のできなかったジョン・コンスタブルを画家にしたのが、故郷のストウ河の風景であると言えるなら、ボニントンを作ったのは運河の港(ポート)と船舶(シッピング)であった、と言えよう。しかし、運河を見て育ったボニントンではあるが、海を実際に見たのは家族とともにカレーに向けて発った時が初めてであった。カレーに落ち着いたボニントンは海を見て過ごし、その海が彼の作品の大きなテーマとなっていくが、この「海」は生まれ故郷の運河の延長線上に位置すると考えられる。

(2)

イギリスは十八世紀後半から十九世紀前半のほぼ一世紀の間に、J・R・カズンズ、ターナー、トマス・ゲーティンら、ジョン・セル・コットマンらの優れた水彩画家を多数輩出させ、イギリス水彩画の全盛時代を作り上げた。

イギリスの風景画には二つの大きな流れがあった。その二つの流れとは、十七世紀オランダに源流を持つ「地誌的風景画」(Topographical Landscape)と、南欧イタリアの影響により十八世紀中に出現してきた「理想的風景画」(Ideal Landscape)の流れである。

「地誌的風景画」は、現実の場所や光景を事実通りに描写することを主眼とし、風景の対象としてロンドンの町並みとかテムズ河などの英国内の風景をとり上げる。画家の審美感や個人的印象を極力抑えて、対象物を正確に写実的に描写することを第一の目的とするものである。オランダの単色画の伝統を引き継いで発展し、光と大

気のかもしだす雰囲気を効果的に表現した。さらに単色有彩の地色の上に重ねて使う色の範囲を少しずつ広げていき、英国化していった。

「理想的風景画」は、自然の風景をそのまま描写しようとはせず、自然の中の不完全なものを取り除き、美しい要素のみを選び出し、その要素を自由に組み立て、最も美しくあるべき理想的風景を作り上げようとするものであった。

自国の風景を描く画家はほとんどいなかったイギリスに、風景画という新しいジャンルが成立するためには、「崇高美」(The Sublime)、またウィリアム・ギルピン(一七二四―一八〇四)らによる「ピクチャレスクな美」(The Picturesque)の流行があった。

水彩画においても新しい技法が発見され、それ迄主流であった油絵に比べて一段低く見られていた水彩画が、光と雰囲気を与えるための効果的な技法であると見られるようになってきた。一八〇四年、水彩画家たちは自分たちの名誉を守るために、一七六六年に設立されたロイヤル・アカデミーに対抗して、「伝統水彩協会」を設立した。この協会の創設によって、水彩画は展覧会の出品作として認知されるようになった。

(3)

カレーに移ったボニントンは、ルイ・フランシア(一七七三―一八三九)という画家に認められてその下で学ぶことになる。彼がフランシアのもとで学んだのは幸運であった。その理由は、フランシアはイギリスでカーティ

ン(一七七五—一八〇二)やジョン・ヴァーレ(一七七八—一八四二)などの風景画家たちと一緒に学んだことがあり、その経験のもとで彼独自の技法を水彩画において発展させていたからである。ボニントンはフランスにおいて、雲の描き方、空の塗り方など、イギリスの水彩画の伝統を吸収し始めることになる。

ボニントンは絵の勉強に励んだが、息子にレースのデザインを学ぶことを期待した両親はその努力を認めようとはしなかった。一八一八年、一六歳のボニントンは両親の反対を押しきって、フランスからの紹介状を携えて、ダンケルクのモーレル市長のもとに旅立った。ボニントンの才能に驚いた市長は、更に本格的に絵の勉強をさせるために彼をパリに出した。パリに出たボニントンは美術学校に通うと同時にグロ男爵(一七七—一八三五)の工房に登録する。

グロはジャック・ルイ・タヴィッドのもとで学び、古典主義の地位を師から引き継いだ画家である。だが、やがて師の古典主義から離脱し、ナポレオンを主題とした戦争画を数多く描き、今日ではロマン主義の先駆者ともなされるようになっていく。なかでも「アグキールの戦い」(一八〇六)、「ユイローの戦い」(一八〇八)などの作品が特に有名である。ナポレオンの失墜後、彼の芸術も挫折し、一八二〇年代にはタヴィッド流の古典主義的歴史画に復帰しようと努めたのだが成功せず、一八三五年セーヌ河に身を投げて自殺してしまった。

当時のフランス絵画の主流は歴史画であったが、その歴史画は二つの陣営に分かれていた。色彩をほどこす前にすべてのものを詳細に描くべきであると思えるアングルを代表とする古典派と、自由に表現豊かな筆さばきと豊かな色彩で場面を描くべきである信じるドラクロワを代表とするロマン派である。この時代は古典派とロマン派の対立、そして古典派からロマン派への移行の時代であったのだが、ボニントンは当然のことながら、ロ

マン派に心を引かれている。彼はルーブルに通いオランダ・フランドル派の模写に励んだが、そこで偶然ドラクロワに出会ったという。二人はすぐに親しくなり、ジェリコにも励まされたボニントンはルーベンスを注意深く学んだ。ここで学んだものをボニントンは後に歴史的衣裳^{コスチューム}絵画に利用している。

古典派とロマン派の対立は絵画の主題の選択にも現われる。古典派がギリシア・ローマの歴史に題材をとるのに対してロマン派は中世のロマンスを好んだ。若い画家たちは歴史画の背景を学ぶためにローマに出かけるか、中世の遺跡を見に北フランスや北イタリアに出かけるかであった。ロマン派の人々はイギリスにも出かけ、その地でシェイクスピアの戯曲やサー・ウォルター・スコットの歴史小説などにも注目することになった。

ボニントンはノルマンディを初めとして、ルーアン、ル・アーブル、ブラローニュ、ダンケルクなど、フランス北部の海岸沿いを旅行している。初期の傑作といわれる「聖オマール近くの聖ベーリン修道院」(一八二二)という油絵はこの旅の産物である(これはノッティンガムのカスル・ミュージウムにある)。

一八二二年、ボニントン二〇歳の時、これらの旅行を題材とした作品をパリのサロンに初出品する。二四年のサロンでは、彼はメダルを受けているが、この年のサロンにはコンスタブルやトマス・ロレンスの作品も展示され、コンスタブルの「干し草車」がフランス画壇にセンセーションを与えた。コンスタブルがイギリスよりもフランスで先に認められるようになったのは、このサロンであった。

ボニントンはコンスタブルを賞賛していたし、ドラクロワもコンスタブルを高く評価していたので、一八二五年二人はイギリスへの旅に出ることになった。一五歳の時にイギリスを離れて以来、八年ぶりの生まれ故郷であった。二人の友情が厚くなったのは、このイギリス滞在中であった。二人はロンドンで共同制作をし、「メイリ

ック・コレクシヨン」の武具などを描いたりした。パリに戻ってから二人は工房を共有し、ボニントンはドラクロワのおかげで交友関係を広げていくことができた。

一八二五年イギリス訪問からパリに戻ったボニントンは、自分の作品のマーケットは故郷イギリスだと確信するようになる。一八二六年ブリティッシュ・インスティテューションに「フランス海岸」「漁師のいるフランス海岸」の二枚の絵を出品し、二枚とも売れた。『リテラー・ガゼット』の批評家から「ボニントンとは何者か？ これまでどんなカタログにもこの男の名前を見たことはないが、今ここに風景画において第一位を飾る絵がある。日光、遠近、活力、色彩の配置における美の感覚、マスであれ小さい部分であれ——これらが部屋に異様な光彩を添えている。」と熱狂的な注目を受ける。二週間後、同じ批評家は「漁師のいるフランス海岸」にふれて「これ迄、注目すべきこの絵ほど多くものに戸外の日の照る昼中の特徴を表現したものはなかったし、主題が与える単純な素材からこれほど多くのものを作り上げた画家はほとんどいなかった。荒削りの広い絵筆で彼は人物とアクセサリーの特徴と、輝く透明なすばらしい色調を捉えている。」と絶賛している。

ドラクロワはボニントンの外向的な性格に引かれたと言われている。ドラクロワは孤独感に悩まされがちであったので、ボニントンの存在はそれを癒してくれるものであった。更に、ボニントンの衣装の趣味の良さは、ダンディ好みのドラクロワを喜ばせたようだ。ボニントンとドラクロワはブリティッシュ・スタイルの衣服や靴のフランス導入に功績があったと言われるくらいであるから。

そんなドラクロワであったから、彼がイギリスを訪れたとき、英国人があまりにもみすばらしい衣服を纏っているのを見て、驚いたといわれる。また、英国婦人が汚いストッキングと不細工な靴を履いているのにも大変な

ショックを受けた。後年、ドラクロワがパリでターナーと会った時の印象を「ターナーは黒の野蛮な上着をつけ、重そうな靴を履いて、まるで農夫みたいに見えたが、それも特に驚く程のことではなかった」と述べている。

(4)

一八二六年春、ボニントンはシャルル・リベット男爵とともにヴェニスに出かける。男爵はドラクロワの友人で、新興ロマン派のパトロンでもあり、彼自身画家でもあった。四月四日にパリを発ち、十一週間の旅行であった。この旅行中の出来事は、リベットが日記を残しているので、かなり詳しく知ることができる。

二人はパリから南下し、セムール、ドレを通過してジュネーブに出た。ジュネーブにしばらく滞在し、シオン、ブリュグ経由でアルプス越えをし、イタリヤに入った。まずミラノで数日を過ごし、ブレシアを通過してヴェローナに出たのは四月一八日であった。そこから二日後にヴェニスに到着したが、あいにくとヴェニスは雨で、空はどんよりとした鉛色であった。「陽光のヴェニス」はこれまで多くの画家によって描かれているので、ボニントンが「雨のヴェニス」を描かなかったのは残念な気がする。ターナーやコンスタブルと比べて、ボニントンは霧囲気に影響されるタイプの画家であったようで、この悪天候は彼の絵筆を鈍らせた。天候同様、ボニントンも憂鬱な気分になってしまったようだ。

帰る頃になってやっと空が晴れ、ボニントンの憂鬱な気分も直った。彼を捉えたのは、ヴェニスの建築物と

広々とした水、ヴェニス派の巨匠たちが好んで描いた古の衣装の美しきであった。ヴェニス派の巨匠たちの絵画や建築物に囲まれて、ボニントンはこれ迄夢にまで見た色彩の美しさと芸術性を発見したにちがいない。

ヴェニス旅行はボニントんに歴史感覚の大切さを自覚させた。彼は人物画でヴェニス派の巨匠たちの色彩と競おうと思ったようだが、彼のヴェニス滞在は不運であった。光と太陽の魅力を充分に味わうには天候が悪く、三週間の滞在期間も短すぎた。ヴェニスを去る日がやって来ると、ボニントンは黙りこくってしまった、とりべツトは記している。

帰途はパデュア、フェラーラ、ポローニアを回ってフィレンチエに着き、そこに一週間滞在した。この間、ピサにも出かけている。フィレンチエからはサルザナ、レリテイ、ラ・スベジア、アレサンドリア、テューリン経由でパリに戻った。

ヴェニス滞在中に、父親からの手紙で彼が半年間に描いた絵が全部売れたという知らせを受けていたが、パリに戻してみるとその代金が彼を待っていた。リベットの記すところでは、一月からの収入は七〇〇〇〜八〇〇〇フランにも達していた。この代金は彼の画家としての成功を確実に約束するものであった。前途には輝かしい未来が待ち受けているように思えたことであろう。

しかし、未来には暗い影がさしていた。イタリア旅行は彼の体力を消耗させてしまったようだ。彼の死因となつた結核の発病はこの旅行にあつたと思われる。

一八二七年になると、ボニントンの体力は次第に衰えていく。しかし体力の消耗と反比例して、彼は精神的に仕事をこなしていく。顧客からの注文はますます増えてきたし、さらにイタリアでのスケッチ画を仕上げて展示

すること、歴史や文学に主題をとった作品の制作など、やるべきことが沢山あった。

体力の衰えにもかかわらず、ボニントンはフランスの絵画市場に依存しすぎるのはよくないと考えて、イギリスとの接触を大々的に図るための手段を講じ始めた。この判断には先見の明があり、彼の慎重な性格を示している。フランスの政治状況は依然として不安定であり、何か政治的動乱が起れば必然的に経済不況になるであろうから、それに対する防御策が必要であると彼は考えたのである。

美術商シユロスはすでに一八二六年に経済的に追い込まれ、油絵を購入するのは止めて本来の版画商に戻っていた。彼はイギリスとフランスの美術を結びつける重要な美術商で、ボニントンの作品を世に出すのに力を貸してくれたし、コンスタブルの絵画をロンドンで買いつけ、パリの目ききに紹介した。従って、彼の商売の縮小は「現代派」とっては大きな打撃であった。現代美術を扱う美術商は他にもいたが、彼らも経済的に苦しい立場に追い込まれていた。イギリス人でパリで美術商として活躍していたアロウスミスはシユロス同様、ロンドンでコンスタブルを買いつけていたが、破産によって終わりをとげた。これはコンスタブルにとっても不幸なことであった。コンスタブルは経済的に重要な収入源を失っただけでなく、国際的な名声を打ち立てる機会をも失った。もし彼の絵画がパリで売れ続けていたならば、彼の故郷の人々は彼をもっと尊敬したであろうし、彼が見捨てられ、嘲笑された芸術家として生涯を終えることもなかったであろう。

このような状況のなかで、ボニントンは自分の作品の発表舞台はパリではなくロンドンにすべき時が来たと考えた。そのためには当然のことながら、英国人に自分の名前を知ってもらわなければならない。王立美術院やブリテイシユ・インスティテューションの常連になることが必要であった。さらにロンドンで彼の作品を扱って

くれる美術商を捜す必要があった。ドミニック・コルナーギが候補として考えられた。彼はコンスタブルにフランスの美術商アロウスマイスと手配するように勧めた人であった。

一八二八年、ボニントンは初めて王立美術院に出品し、その夏、英国に出かけた。彼はコルナーギと早急に契約する必要があったようだ。コルナーギとの間に契約がなされ、ボニントンの友人でパトロンでもあったジョン・バーネットも彼に作品を委託することになった。

英国におけるボニントンの友人に、美術と彫版の分野で著名なクック家と、ボンド・ストリートで書籍と版画を商うカーペンター父子があった。父親のジェームス・カーペンターは、コンスタブルの作品の早い頃からの称賛者で、すでに一八一四年には「水門」を描いた絵を彼から購入していた。ボニントンはコンスタブルとは会っていないが、カーペンター家で、「水門」を含めてコンスタブルの幾つかの絵を見ていたのは間違いない。コンスタブルはそれまで見も知らぬ人であったカーペンターが、ただ作品を気に入って購入してくれたことをとても喜んだ。その後はコンスタブルはカーペンター商店から書物を購入したり、美術界の情報を貰ったりしている。ボニントンの死後、コンスタブルはボニントンをあまり評価はしていなかったようだが、息子のウィリアム・カーペンターに手紙でボニントンの版画を注文している。ボニントンとカーペンター父子の親密な関係にもかかわらず、両者の間には何も記録が残っていない。しかし、ウィリアムの妻、マーガレットが画家であったのでボニントンの肖像画を残している。

パリに戻ったボニントンは十一月のサロンに『ヴェニススのドウカル宮の景色』など数点を出品する。

一八二八年の春、ボニントンは五月に開催される王立美術院の展覧会の準備のためにロンドンに渡る。今度はフォースター夫人からのサー・トマス・ロレンス宛の紹介状を携え、この機会にロレンスに自分の作品を見て貰うつもりであった。ロレンスは一八二〇年、ベンジャミン・ウェストのあとを継いで王立美術院の院長に就任した英国画壇の大御所である。もともとロレンスは肖像画家であったから、ボニントンが見せた作品は風景画ではなく、人物画であったと思われる。

五月の展覧会にボニントンはヴェニス風景画と、フランス王アンリー八世の人物画の二点を出品した。ボニントンの作品を見た『リテラリー・ガゼット』の批評家は「短期間のうちに、この有能な画家は輝かしい絵筆で目覚ましく頭角をあらわし、どの作品も彼の才能を十分に保証している」と絶賛している。

彼の必死の努力にもかかわらず、ボニントンの病状はますます悪化していった。七月にロンドンからパリに戻った彼の体力は消耗しきっていたが、その創作意欲は衰えることはなかった。彼はノルマンディー地方に旅行すれば病状も回復するのではないかと考え、友人の画家ユエットと出かける計画をたてた。しかし出発前に突然、彼の病状は悪化し、パリを離れることができなくなってしまった。もはや彼は友人の助けをかりて、近くのブローニュの森に出かけるのがやっとであった。一八二八年の真夏には、車椅子が必要とさえなった。そしてある日、セーヌ河の土手でスケッチをしていると、彼は日射病に襲われて倒れてしまふ。

最後の望みとして、ボニントンの家族は彼をイギリスに移動させることにした。ロンドンにリュウマチと結核の治療で有名な医者がいたからである。パリからの移動は駄馬車であり、家族がアヴェビルに到着したのは九月六日であった。この頃にはもう手紙を書くこともできず、ジョン・バレットへの手紙も母親に口述筆記してもらい、自分の名前を署名するのがやっとであった。この手紙の中で自分は病氣治療のためにイギリスに行くが、もう駄目だと深い絶望感を表明している。

ロンドンに着いたボニントンはジョン・バレットの家に滞在する。彼は瀕死の身ではあったが、芸術上の実験や革新に対する情熱は衰えず、彫版師W・J・クックのもとに連れて行ってもらい、椅子に支えられて、当時クックが試験していた新しい褐色のインクでスケッチをしたりしている。この様子はこの頃クックのもとで徒弟修業をしていたジョン・サドラーによって書き残されている。

ボニントンは一八二八年九月二三日、あと一か月で二六歳の誕生日を迎えることなくジョン・バレットの家で死んだ。彼の遺体はペントンヴィルの聖ジェムス教会に埋葬された(一八三七年六月、彼の遺体はケンサルグリーン墓地に埋め替えられた)。葬式ではサー・トマス・ロレンスを先頭として多くの王立美術院会員が葬列に従った。まだ二六歳に満たない、会員でもない画家に対する葬儀としては異例のことで、ボニントンが当時の画家のなかで実に異色な地位を占めていたかがわかる。